

昭和五十三年十月十四日、日本商工会議所百周年を記念して「日本橋・京橋まつり」が開かれ、佐賀県唐津市から「唐津曳山」二台が特別参加しました。保利さんは、はっぴ姿にねじり鉢巻き、右手に采配を持って先導役をつとめたのですが、出発して間もなく、方向を変えようとして引張られたロープに足を取られました。保利さんにも本橋さんにもけがはなく、周囲の人々は胸をなでおろしたのですが、驚いたのはこのあとです。

こんなアクシデントがあったにもかかわらず、保利さんは残り約二キロのコースを、時に小走りで元気に歩き通しました。「エッサー」「エッサー」。曳山を包む掛け声を背に「どうだ。勇ましいじゃろ。このはやしの調子が上がってくると、黙っておられん」と保利さん。わずか数週間後には、楽しみにしていた中国訪問を取りやめ、つらい闘病生活が始まっただけに、少年時代に返ったような得意気な笑顔は忘れられません。

地方支局から政治部に移って一年数カ月。衆院クラブに配属されて会った保利議長は、生半可な知識では太刀打ちできぬ雰囲気を持つ政治家でした。五本木のお宅へうかがっても、二言三言ことばを交わすだけで帰る日が続ききました。ところが、そんな保利さんが珍しく多くを語った日があります。五十三年七月三日です。

「いまの解散論議はどうも原点を見失っているようだ」と語り始めた保利さんは、衆院解散の精神はあくまでも憲法六九条にあること、憲法七条で解散するのは、与野党対立で国会がまひしたり、前回の総選挙後に国論を二分するような重大な問題が起きた時に限られる、との考えを、自らの体験も交じえながら詳しく説明しました。

「いずれ機会があれば、公式に発言する」と最後に付け加えました。公邸に着いてから議長秘書の岸本さんに、その内容を再び話し、記録に残したことは後で知りました。亡くなってから発表された「解散に関する見解」です。メモ帳に残る言葉に今も教えられることが多く、その意味で保利さんは私にとって、決して「過去の政治家」ではありません。

「保利書簡」の思い出

中 嶋 嶺 雄

(東京外語大教授)

わが国にとって大きな歴史的意味をもった日中国交回復は、米中接近以後の急激な国際情勢の展開のなかで、田中内閣の成立後、一挙に実現した。だが、それは、佐藤内閣が一貫した中国政策をあえて保持し来たがゆえに、対日姿勢転換へのきっかけを待っていた中国側をも動かして、一気に懸案が解決されたのだといえよう。しかも、佐藤内閣の末期には、中国問題の打開に向けて様々な努力が水面下でおこなわれていたのであり、有名な「保利書簡」問題は、それが表面に出たことによって、多くの話題を集めた出来事であった。

当時私は、中国問題打開のために内閣官房長官の非公式な諮問機関としてつくられた「国際関係懇談会」のメンバー(委員兼世話人)だったが、一九七一年十月十一日、佐藤内閣の首席秘書官であった楠田実氏(現国際交流基金監事)を通じて、自民党幹事長の保利さんが佐藤首相も承知のうえで周恩来総理

に書簡をしたため、従来の政策の一貫性のうえに立ちつつも、日中関係を是非打開すべき決意をもっておられることをお聞きし、その書簡の草稿についての相談を受けた。いわゆる「保利書簡」の全文は、岸本弘一氏の手になる評伝『一誠の道―保利茂と戦後政治』（毎日新聞社、一九八一年）で公表されたが、一般には周恩来首相が受け取りを拒否したと報じられた「保利書簡」こそ、佐藤内閣の中国政策に責任ある側の政治家が成し得る最大限のメッセージであった。その内容は中国側としては即座に受け容れ難いものであったにせよ、周恩来首相自身が「保利書簡」をしかと読んだことによって、日本側のシグナルを十分に感じたところに、画期的な意味があったのである。

私は、この重大な経緯の一端に触れていたのであるが、当時は、その原案の起草を佐藤総理や保利さんも承知のうえで、楠田氏を通じて私に御下問されたものとは知らなかった。保利さんから直にこの書簡のことを依頼されたのではなかったからでもある。

だが、偶然のいたずらというのであろう。美濃部知事に託した「保利書簡」が表に出て大騒ぎになる一週間程前の七一年十一月二日の午後、赤坂御苑で催された秋の園遊会に私も招かれ、園内をそぞろに散策していると、紅葉の御苑の奥まった庭隅に、どうしたことか、あの大柄の保利さんが礼服に威儀を正して独りポツンと佇んでいるではないか。私は保利さんに近寄り、「先日の周恩来首相宛書簡を手伝わせていただいた中嶋です」と言い出しそうになって、一瞬、いやもしかしたら、そのことを保利さんは知らないのかもしれない。だとすれば、これは私から言い出すべき事柄ではなからう、という想いに駆られ、そのままそつと保利さんに会釈をしただけなのであった。

「松露」の土産

中野 土朗

（読売新聞ニュースキャスター）

さわやかな初夏の頃だったと思う。昭和四十年か四十一年、政治部記者として全く駆け出しの私が、首相官邸担当のキャップから、保利さんの取材を命じられた。その頃の私にとって、保利さんは「吉田ワンマンの官房長官」というイメージが強く、「寝業師」という先輩たちの評を頭から信じ込んでいた。大いに緊張して目黒・五本木のお宅を訪ねると、奥の和室に通された。比較的簡単な私の質問に答えてくださったあと、「おお、そうだ」と奥様に声をかけられ、「今朝、佐賀から届いたのでネ」と、ニコニコと「松露」を包んでくださった。「今度の新人は、初対面の保利さんにおみやげまでもらってきた」と、キャップが驚いた顔をしてはめてくれたのをいまでも覚えている。

当時の夜討ち朝駆けは、いまほどせちがらくはなかった。とくに朝は、若い記者ががんばって出かければ、実力者とも一人で会えた。田中幹事長を担当した私は、政局がひまな時は、目白と目黒を交代で朝駆けしたりした。五本木のお宅の応接間で、保利さんは、いつもきちんと応接してくださった。鼻歌？ を歌っていたかと思うと、突然、目の前で、新聞の大見出しになるような電話をかける田中幹事長とは、きわめて対照的だった。

保利さんは、窓の外を眺め、しばらく考えて質問に答えてくださった。ナマの失礼な質問をすると、

党の方に分け、続いて(4)財・官界の方、(5)学界・言論界の方、(6)地元及び縁故関係の方と六分類して掲載する。各分類の中では、氏名の五十音順に配列し、それぞれについて内容に即したタイトルを付け、肩書に関しては、昭和五十九年十二月一日現在で重要なものを一、二付させていただく。また、ご寄稿中のご冥福を祈る言葉などは、刊行委員会による「刊行の辞」で代表して捧げさせていただく、ことにしました。なお紙数がかかなり超過されている方につきましては、一部を割愛させていただいた場合がございます。

何かと失礼の段、かつ不行届きの点があるかと存じますが、編集担当者として慎んでお詫び申し上げます。

この本の編集・製作に関しましては、かつて保利茂先生の取材に当たった朝日新聞Ⅱ羽原清雅、中島俊明、毎日新聞Ⅱ岸井成格、読売新聞Ⅱ高橋利行、共同通信Ⅱ小林正行、時事通信Ⅱ江口伸幸、NHKⅡ畑源生、堀徹男の各氏及び元東京新聞記者で出版社社長の宮脇道生氏に大変お世話になりました。また連絡事務は、保利耕輔事務所の山田隆敏、副島礼子氏にお願いしました。

玉稿をお寄せ下さった方々、ご指導、ご協力下さった方々に対し、重ねて心からお礼を申し上げますと同時に、この書物を皆さまのお気持ちとともに保利茂先生の墓前に捧げ、ご冥福をお祈りしたいと思います。

(保利茂伝刊行委員会事務局長 岸本弘一)

追想 保利茂

〔非売品〕

昭和六十年三月四日発行

編集 保利茂伝刊行委員会

発行 株式会社 不味堂出版

制作 東京都文京区大塚三ノ八ノ一
電話 〇三一九四六―二三四五番